

乍黒，乍白，蝕於上部則聲喝(一作嘎)，甘草瀉心湯主之。

甘草瀉心湯方 甘草四両 黄芩三両 人參三両 乾姜三両 黄連一両 大棗十二枚 半夏半升
上七味，水一斗，煮取六升，去滓，再煎温服一升，日三服。

参考条文

金匱要略・百合狐惑陰陽毒病証治第三

第11条 蝕於下部則咽乾，苦參湯洗之。

苦參湯方 苦參一升，以水一斗，煎取七升，去滓熏洗，日三服。

第12条 蝕於肛者，雄黄熏之。

雄黄熏方 雄黄

上一味為末，筒瓦二枚合之燒，向肛熏之。

(脈經云，病人或從呼吸上蝕其咽，或從下焦蝕其肛陰。蝕上為惑，蝕下為狐，狐惑病者，猪苓散主之。)

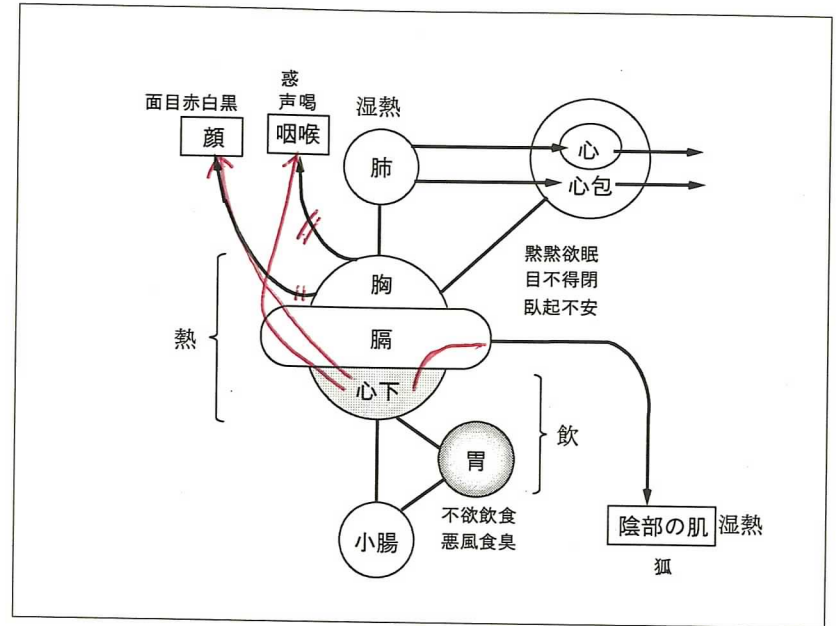
「狐惑の病の病態は傷寒に似ていて，黙黙として眠りたいと思っても目を閉じることができず，眠れない，いらいらして落ちつかず不安感がある。喉が爛れるものが惑，陰部が爛れるものが狐である。飲食を欲せず，食臭を嗅ぐのも嫌がる。顔は，今赤いと思うと急に黒くなったり白くなったりする。喉が爛れると声がかすれる。甘草瀉心湯がこれを主る。」

もともと胃気の不和があり，胃気は衰え，食物は消化されず，胃中に飲を生じているため「不欲飲食，悪聞食臭」。胸・膈・心下には熱があり，胸中の熱のため「黙黙欲眠，目不得閉，臥起不安」を生じる。胃飲は心下にも貯留する。心下の飲は，胸・膈・心下の熱のため湿熱となり，肌に游溢し，咽喉部に流注すると「惑」，前陰，後陰の肌に流注すると「狐」となる。また胃気の不和のため守胃機能が衰え，胃気が顔面に過剰に昇ると「面目乍赤」，心下の飲をともなって昇ると「乍黒」，逆に胃気が，胸・膈・心下の熱に阻まれて顔面に達しないと「乍白」となる。

220 狐

咽喉
前陰 (性器)
後陰 (肛門)

これらはともに粘膜であり，裸の肌が露出している場所である。



処方解説

黄芩，黄連で胸・膈・心下の熱を清し，半夏，乾姜で胃，心下の飲を捌く。甘草，人參，大棗は胃気を守る。甘草瀉心湯にて胸・膈・心下の熱を清し，胃，心下の飲を治療すれば，中心部から離れたところの症状である「惑」「狐」「面目乍赤」「乍黒」「乍白」などは癒える。

第10条の条文には「惑」は甘草瀉心湯が主るとし，第11条，第12条の条文では「狐」は苦參湯でこれを洗滌し，雄黄で熏蒸するようになっているが，心下の飲が上焦（喉）や下焦（陰部）に流注して生じている「狐」であれば，甘草瀉心湯は有効であると考えられる。甘草瀉心湯を服して，苦參湯，雄黄熏を併用すると考える方が妥当である。